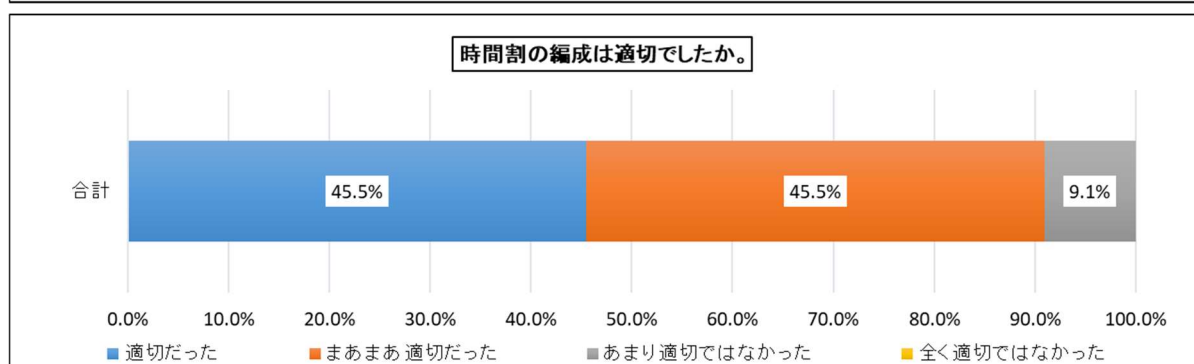
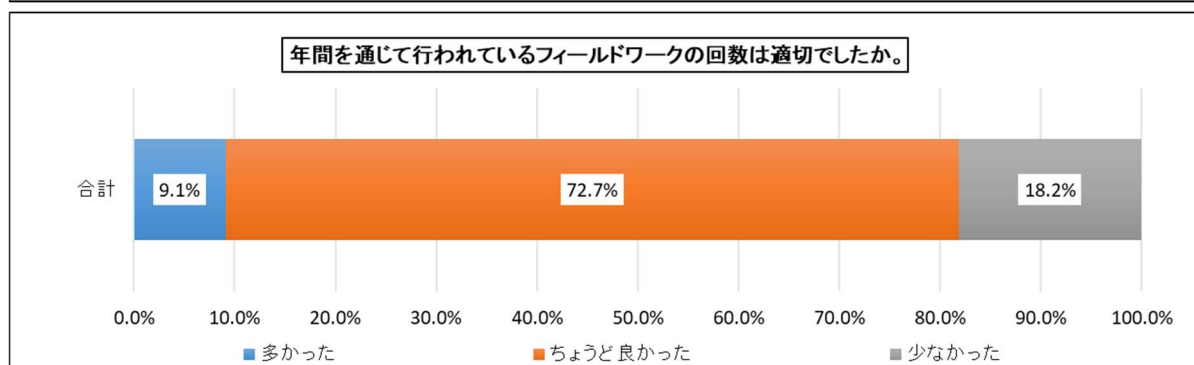
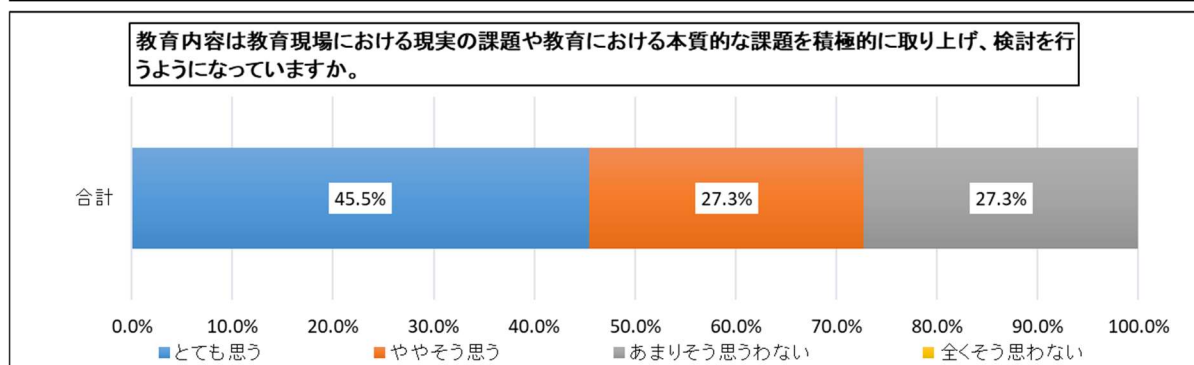
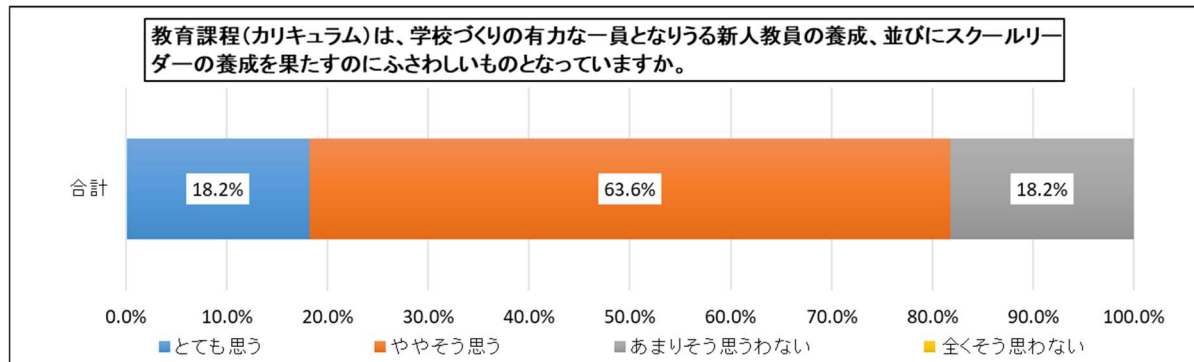


2019 年度「研究科アンケート」

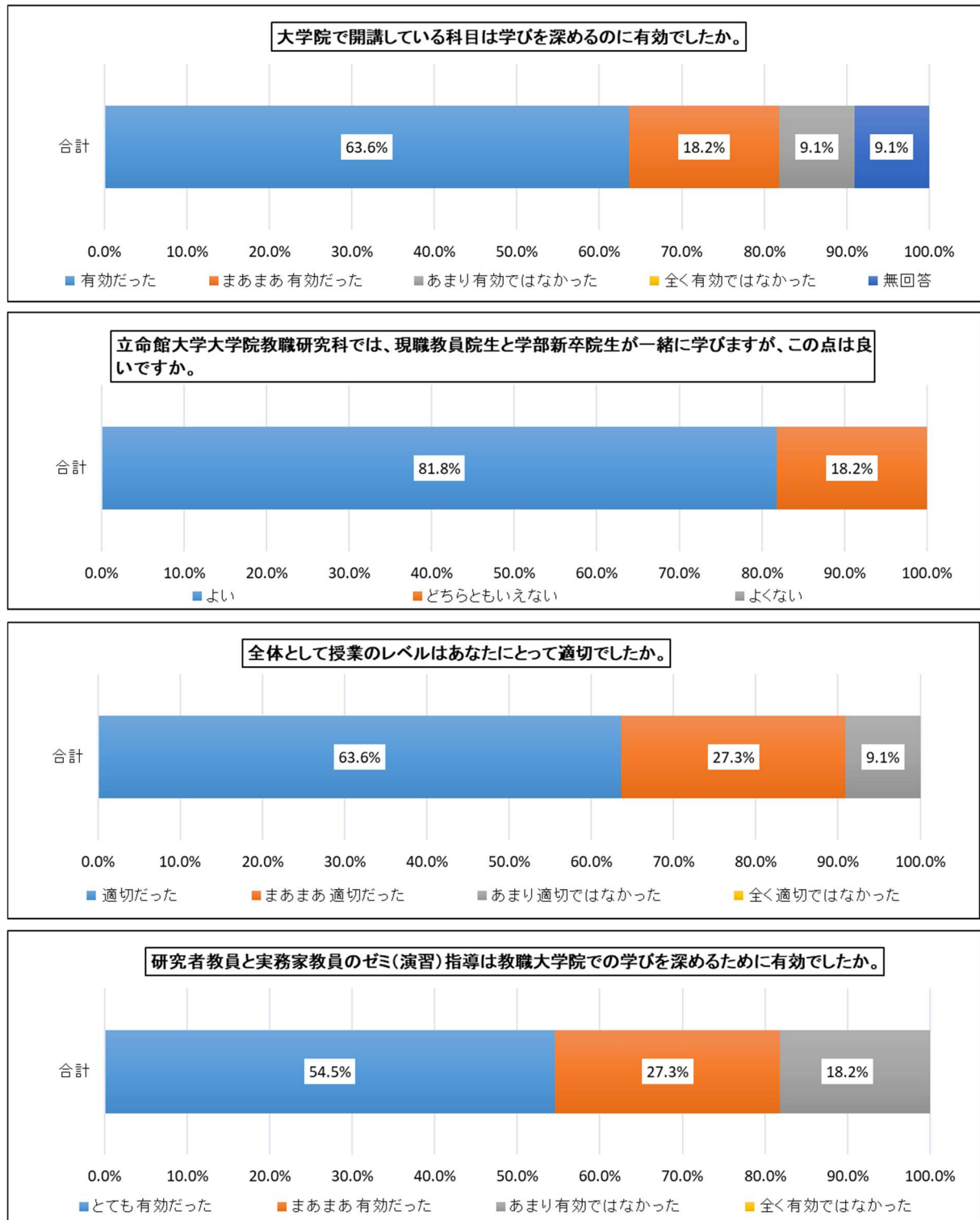
コロナウイルス蔓延の影響で、本年度の研究科アンケートの実施及び集計は郵送により行わざるをえなかった。そのため回収率が非常に悪く、M1 の回収数は 1、修了生の回収数は 11 であった。修了生 11 名の集計のみ行ったが、本来の回答数の 1/3 であるため、昨年度の結果との比較は困難である。

(1) 教育課程について



「教育課程について」は概ね良好な回答であった。教育内容に関して否定的な回答をしたのは3名で、自由記述において教科の専門性の欠如と科目の偏りを指摘していた。少数とはいえ、次期カリキュラム改革における重要な指摘だと受け止めている。

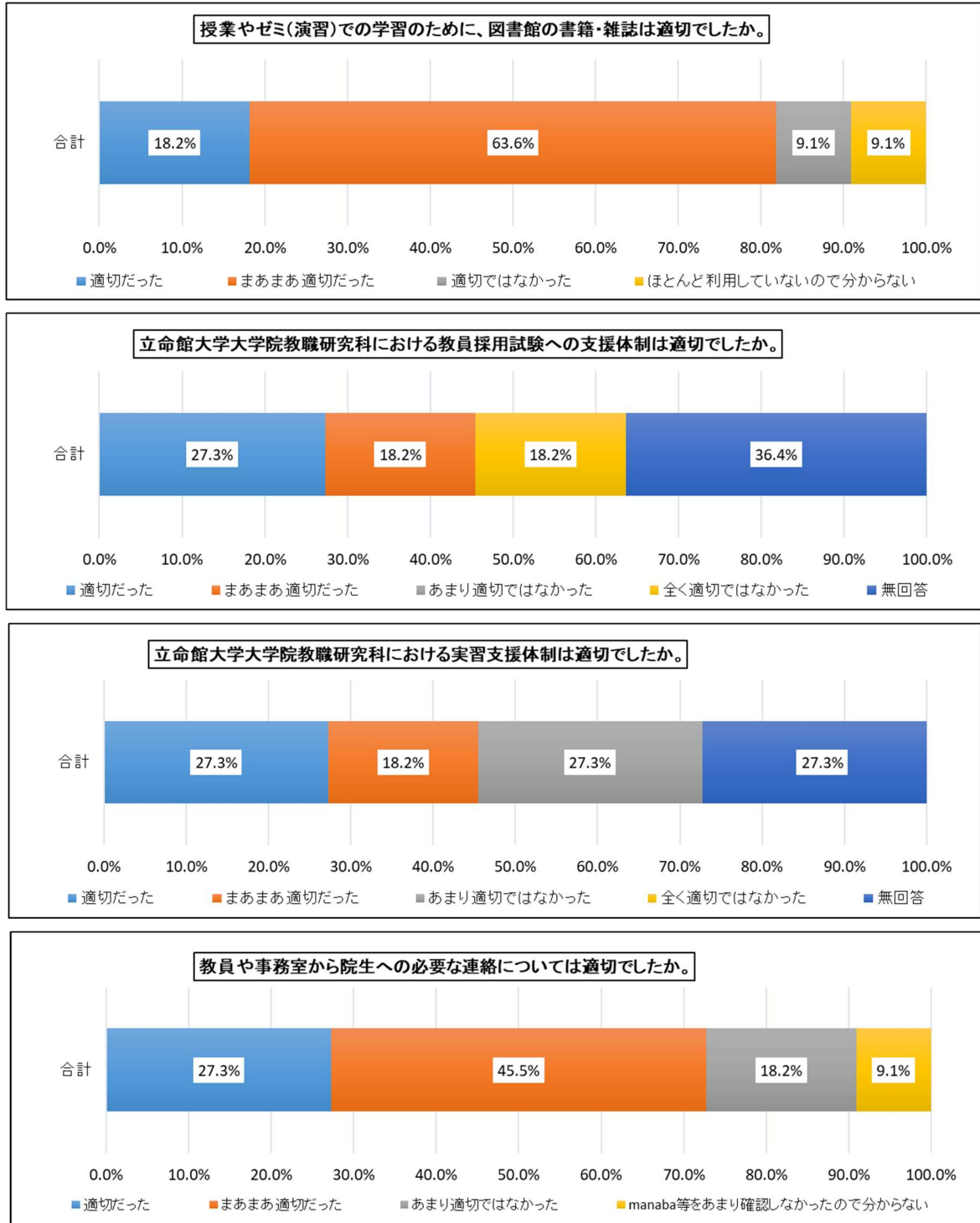
(2) 授業について

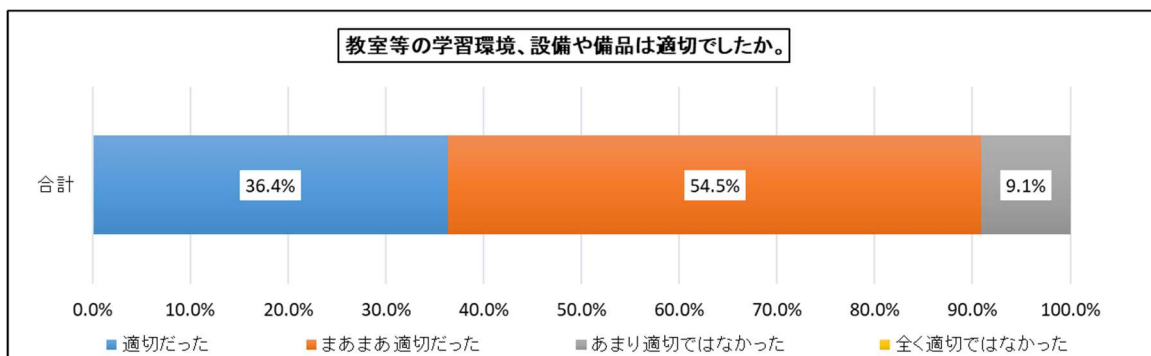


「授業について」の結果もおおむね良好である。研究者教員と実務家教員のゼミ（演習）指導は学びを深めるために有効であったかという設問に関して否定的な回答をした者

は、院生がゼミを選択できないことに起因するものだと考えられる。院生が探究したい内容とゼミ担当教員の専門性を合致させることも次期カリキュラムの課題となる。

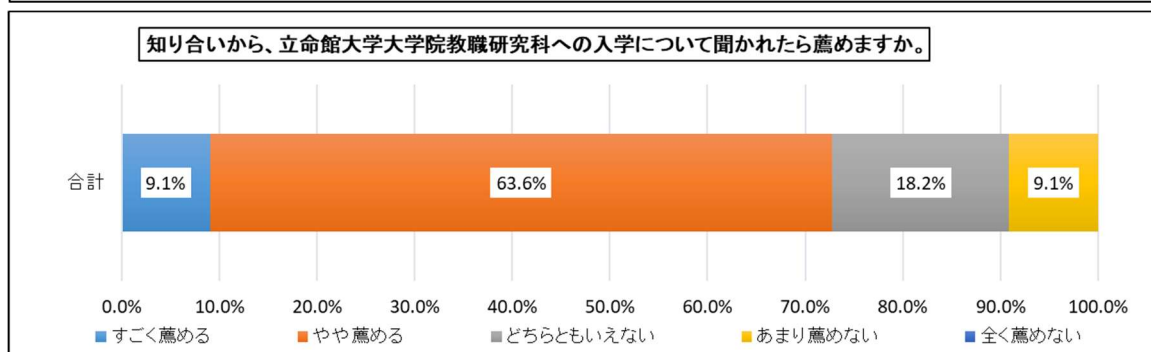
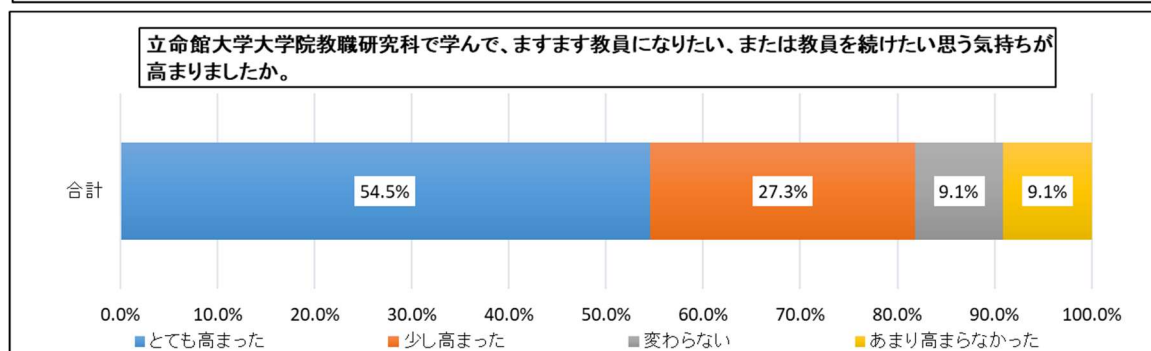
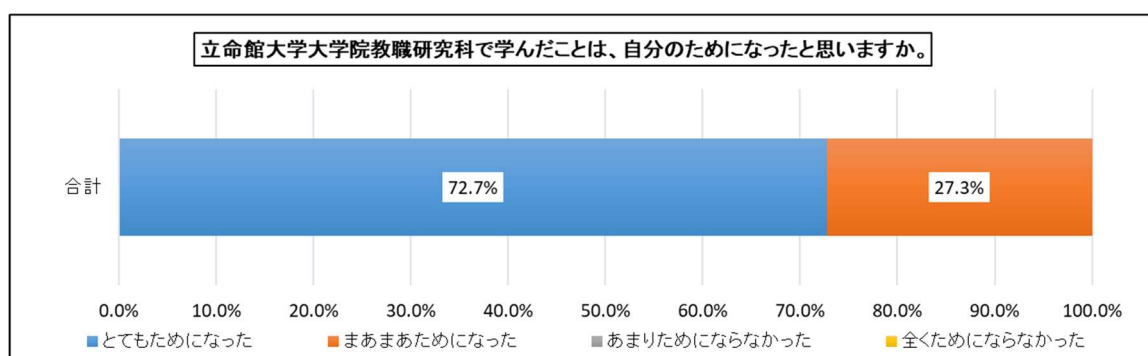
(3) 学生支援について





「学生支援について」の課題が多い。教員採用試験への支援体制について適切でなかったと回答している学生が比較的多い。就職支援体制については、採用試験の結果が芳しくない場合、否定的な回答になると考えられる。採用試験の合格率向上に努めたい。無回答は採用試験に合格している者や現職院生であろう。実習支援体制があまり適切ではなかったという回答については、教職大学院の実習に関して、未だ実習校と共通理解が図れていないことが原因である。今後改善していきたい。教員や事務室からの連絡はmanabaの活用が十分できるようにオリエンテーション等において働きかけていく予定である。

(4) 全体を通して



すべての学生が、教職大学院の学びが自分のためになったと回答している。教員になりたい、教員を続けたいと思う気持ちに関して「変わらない」「あまり高まらなかった」という回答は、元々それが高かったとも考えられる。しかし、本学の教職大学への入学をあまり薦めないという 1 名 (9.1%) の回答は気になるところである。